2009（平成21年）7. 30

漢詩神奈川

第６号

神奈川県漢詩連盟
横浜市旭区中沢
３－３９－９
電話045-361-2033
FAX045-361-2033
発行人 中山　清
編集人 田原 健一

横浜開港１５０周年

漢詩大会盛会裡に終る

県外の入賞者２１名も出席

神奈川県漢詩連盟の第４回総会は、平成２１年５月２１日（木）午後１時より、神奈川近代文学館で【横浜開港１５０周年漢詩大会】の表彰式を兼ねて執り行われた。長崎や岡山など県外各地から入賞者のお客様をなんと２１名もお迎えして、総勢８４名もの会合となり、連盟始まって以来の盛大な総会となった。

会議は、議決事項や報告等年次総会のプロパーのことは要領良く短時間にて相済ませ、主行事である漢詩大会の表彰式に大半の時間を費やした。

冒頭、今回の地域イベントの主軸である財団法人横浜開港１５０周年協会の斉藤総務部長から祝辞を戴き、特別賞、優秀賞、入選の発表を経て、順次賞状が授与された。続いて選者を代表して窪寺啓先生から懇切な講評がなされた。その後、根津会員の琴をバックに大本会員、室橋会員により特別賞の詩の吟詠が、ホール内に朗々と響いた。特別賞の三重県のお二人小川氏前川氏の受賞のお礼のご挨拶も感激が滲んでいた。

記念講演は、石川忠久先生によるお話で、演題は「横浜に縁りの詩」いつものとおり、判りやすく時間を守っての自在のお話振り、面白く楽しく拝聴した。

この後、すぐ横のホテルポートヒルの３階で懇親会、遠来の入賞者の方の労をねぎらいながら、和やかに杯を交わしながらの懇談、眼下に広がる港の夕景色が好評であった。

（入賞者30名の皆さん）

去年の7月、横濱港１５０年に合わせて漢詩コンテストをやってみようと大それたことを思い立ってから１０ヶ月、役員一同夫々に何かを背負っての忙しい日々の連続であった。吾が県連会員を始め全漢連、関東各県連、役所、新聞社、石川、窪寺両先生、２００人もの応募者、多くの方々の沢山の協力を得て、何とかぶじ成功裡に大会を終えることが出来た。心から感謝したい。

詩集も出来、この港の歴史の節目を称え、寿ぎ、横浜に捧げることが出来た。

この風土との繋がりを自覚し、未来に繋げ得た、そんな充足した思いで暮れなずむ港を眺めた。

（田原）

◆漢詩神奈川の流れを更に力強く！

会長　中山　清

開港１５０周年記念漢詩大会と、当連盟第４回総会を終えて、本連盟の活動も４年目に入りました。

皆様方には益々、作詩の喜びをエンジョイし、作詩力の向上に精進されておられることと拝察いたします。例年行事に加えて前記漢詩大会を実施しました為にスタッフ一同忙しい思いをしましたが、さいわい石川、窪寺、両先生のご指導と会員皆様のご協力により無事遂行できましたこと、あらためてお礼申し （次頁）

あげます。大会には全国から270首の応募があったことに加えて、本連盟会員のご活躍も目覚しく、過去2年の入門講座に参加された会員の方々の入賞、入選が注目されました。

会員も増加して、吟行会では会食の場所選びにも苦労すると言う嬉しい状況ですが、役員一同、力をあわせて連盟の目的達成に一層努力致す所存でございます。皆様方には奮って連盟の行事にご参加戴き、それを詩作力向上の機縁として、機会をとらえて成果をご発表下さいますようお願い致します。全日本漢詩連盟は毎年、「扶桑風韻」に作品を募集しておりますし、来年度の国民文化祭（岡山県）でも漢詩大会が開催されます。

皆様のご活躍を期待しています

横浜開港150周の年記念
漢詩大会　入賞者の言葉

今大会での漢詩応募者201人中、県連会員は61名、他府県139名であった。7割の方が他府県からで、横浜の風物歴史が人を惹きつけてやまない証と見れた。入賞者44名のうち、我が県連会員の方は10名、地元勢として成績が良かったのか悪かったのか定かではないが、特別賞の5名のうち、わが県連会員の方が3名を占めた得ことは、嬉しい限りである。

お願いして受賞の弁を頂いた。

玉楠木に言寄せて

酒井　謙太郎

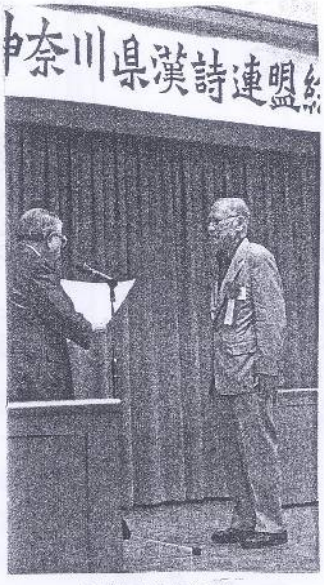
横濱開港資料館中庭玉楠木

昔年蟹舎一汀洲　昔年　蟹舎　一汀洲
今日虹橋千尺樓　今日　虹橋　千尺樓
港畔蒼蒼老樟樹　港畔　蒼蒼たり　老樟樹
應懐桑海幾春秋　応に懐うべし桑海の幾春秋

今回図らずも受賞作に選ばれて、心からお礼を申し上げたい。

実は、応募しようにもなかなか詩想がまとまらず、2月末ごろふと開港資料館に行ってみた。

この資料館は結構面白い。なかでもペリー提督が嘉永七年日米和親条約締結の為横浜に上陸した情景を描いた当時の絵に書き添えられていた「玉楠木」が印象的であった。この樹は当時海岸の古い祠の傍に生えていて目立つ存在であったのだろう。又その後新しく港畔に出来た外人居留地を写した写真の中にも出てくる。



酒井　謙太郎氏

しかも今もこの樹は館内中庭に健在である。そうだ、この樹は日本の開国という歴史上の劇的シーンを見てきており、又その後の横浜の有為転変の生き証人である。これは詩材になると思った。

この樹はその後英国領事館の庭に残り、関東大震災で焼けたが、すぐ新芽を出して再生した由。いかにも横浜の象徴としてエネルギッシュで逞しい。いつしか漢詩のことも忘れて、中庭のこの玉楠木に見とれていた。

今回の開港イベントに神奈川県漢詩連が参加したことは意義深い。地域行事に一体化するこのような動きは他にあまり例が無く、これを打ち出した県漢詩連の着想、ご努力には、心から敬意を表したい。

地域全体がこの玉楠木のように、今後ともしぶとく力強く歩んでゆくことになればと思っている。

百五十年に一度の奇事

大谷　明史

開港横濱村

通商盟契竟開門　通商　盟契　竟に開門
賈館潮聲風満軒　賈館　潮聲　風満軒
晩夏水邊樓上月　晩夏　水辺　楼上の月
銀輪曾照一漁村　銀輪　曾って照らせり一漁村

昨平成二〇年の入門講座受講の第二期生は、事務局のお勧めにより、先輩第一期生に倣って有志の勉強会(三水会)を結成、古田、水城両先生に顧問としてご指導戴いている。

今回の漢詩大会には、中島龍一氏の提唱で全員応募することとし、愚生も自己流乍ら二首提出した。四月某日田原局長より、拙作の絶句が入賞したとのご内報を承って将に絶句した。しかし、夢見心地は一瞬にして終わり、寧ろ粛然として覚えず居住まいを正した。

五月二十一日の総会、表彰式では石川先生より直々に賞状を戴き、窪寺先生もご講評の中にて拙作にご言及下さり(「結句は『蘇臺覧古』の転用」と、内心の秘密も最初から看破せられていた)、式後の懇親会では根津様によるお琴の演奏に載せて中西様に朗々と吟じて戴くなど、わが生涯にただ一度の溢誉の一日となった。又、書家石川芳雲先生は開港横浜村の雰囲気を墨痕鮮やかに表現して下さって居られ、感銘を受けた。

大谷　明史氏

当日配布された開港記念作品集のなかでも石川先生より温かきご評言を頂戴し、正に末代までの栄誉と感奮した。この作品集を拝見して県漢連の諸先生は役員詠草の形で参加せられたことを知った。一般応募者の為に受賞席を空けてくださった訳である。

固よりこの度の身に余る栄誉は、中山先生始め県連諸先生のご懇篤なご指導の賜と銘記している。殊に桜庭先生からは折にふれご教示を戴いてきた。浅学の身としては、他の入賞者の方々のような自在な漢語表現の境地を遠望しつつ、引き続き諸先生のご高導の下、研鑽を積んで参りたきものと念じている。

横浜中華街のこと

宮山　昌子

横濱中華街
一日来遊臨港坊　一日来り遊ぶ臨港の坊
廛頭館裏異邦香　廛頭館裏　異邦の香
獨斟緑酒望窓外　独り緑酒を斟んで窓外を望めば
船點紅燈晩若粧　船は紅灯を点じて晩に粧うが若し

「横浜開港150周年記念漢詩大会」で、まさかの特別賞、全く恐れ多いことです。私は長い間、書に親しみ、その大半が漢詩なのですのに、殆ど読めませんでした。せめて自分で書いている作品ぐらい読めなければという思いで漢詩を学びはじめました。

横浜には、書展でよく足を運びます。帰りは、中華街で美味しい月餅を買い、チョッと一杯、考えるだけでも楽しくなります。中華街を歩いていると、或る独特の匂い、中国に行ったような、第二の故郷のような、私の好きな街で、時を忘れてしまいます。そんな単純なイメージで作った漢詩、参加する事に意義ありで投稿したのが思いもかけず受賞し、一生に一度と思えるような素晴らしい思い出を頂きました。

宮山　昌子さん

いやいや始めた漢詩ですが、今では道を歩いていても「青い空」「白い薔薇」など自然の美しさが目に留まり、すぐ詩に表現してみたい気持ちになります。また新しい詩語を知る喜びと共に、一つの事に対する見方が膨らみ、新鮮になりました。この道の先は全く見えませんが、ケシゴムを友として歩んで行きたいと思っています。そしていつの日か私なりに、中国の旅の「想い」をまとめ、書で表わせたら、詩書の世界を楽しめたらと果てしない夢を見ています。

最後になりましたが、日ごろ親切なご指導をいただき、今回も貴重なヒントをお与え下さった鷲野翔堂先生に心より感謝し、この場をお借りしてお礼申し上げます。

◇『横浜に縁りの詩』

石川忠久先生講演録

今日は横浜に縁りの詩のお話しをします。横浜と言うようになったのは比較的新しいことで、その前は、神奈川で、金川とか金河といっていた。

最初は、石原鼎菴の、「金川を出でて遥かに富士山を望む」、です。石原鼎菴は長崎の出身で1657年、新井白石と同年の生まれです。木下順庵の門下ですね。

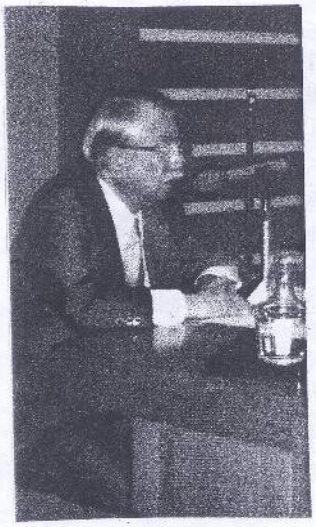
突兀として東邑に臨み
崔嵬として一峰秀ず
凍雲　首夏に晴れ
朔雪　三冬　晦し
惟の嶽　空を凌いで峙ち
彼の岨　漢に逼りて崇し
景行遥かに亘望すれば
初日芙蓉を照らす

大変素朴に詠じています。富士山のことを芙蓉と言っていますが、かの石川丈山の約百年後にあたります。

次は成島柳北の、「将に絵島に遊ばんとして金川を経」、です。

調兵曾て駐む　此の江隅
白馬玄袍　八陣開く
今日　金川台下の路
籃輿　穏やかに綺羅を載せ来る

柳北は1837年生まれ、1884年、明治まで生きました。歩兵頭並から出世して最後は勘定方、大蔵次官になりました。昔歩兵を調練したことを思い出している。玄袍は陣羽織、白と玄の色の対比。八陣は諸葛孔明の敷いた陣形ですね。そのあたりを今日は静々と綺羅、芸者を連れてやってきた、と言う、面白い詩です。今日は紹介しないが、この人には、ナイアガラを詠んだ良い詩があります。



次は、林　檉宇の、「金川驛に題す」、です。この人は林　述斎の子で、1793年の生まれです。

昔遊首を回せば夢悠々なる哉
廿載重ねて此の路を経て来る
唯だ総房山色の好き有りて
依然として翠黛吾に向かって開く

翠黛は、遠山の形容です。

次は、日柳燕石の、「横浜の図」、いよいよ横浜開港後の詩です。燕石は、1817年から1867年の人です。讃岐（香川県）の人で、侠客の親分。高杉晋作をかくまって、四年入牢しています。

横浜の互市に蛮船簇る
聞説く繁華地毯に冠たりと
天主堂高き十字架
星紋旗閃めく七層楼
人は疑う　此の境是れ夷境かと
我は道ふ　何れの州か帝州ならざらんと
泉下の北郎瞑目するや否や
胡奴調馬す　藁街の秋

横浜の絵を見て作ったのでしょう、当時「横浜絵」というのが流行しました。蛮とか夷とか、胡奴、藁街と、外人を蔑んで、ここも帝州なりと、意気盛んです。対句もきれいで、良い詩です。北郎は、地下の北条早雲も目をつぶってはいられまい、ということ。

次は、嵩　古香の、「横浜」です。古香は1837年から1919年、大正八年まで生きました。この詩は1861年、開港の2年後の作で、相当の賑わいだったことがわかります。

海を隔つる孤洲別に郷となる
街に満つる奇貨各々豪商
誰か知らん繡戸瓊楼の地
旧と是れ漁郎の網を晒すの場なるを

この人は僧侶で、詩は大沼沈山にならいました。いま、お孫さんが東松山の了善寺で僧侶を継いでおられ、古香が沈山の批正を受けた詩稿が四千首も出てきて、これは二松学舎で引き取らさせていただき、広く後世に伝わることになりました。

最後は、山田方谷の、「横浜にて夷艦を買う、

艦中の作」です。この人は備中高梁藩の家老を務め莫大な借金をきれいにかえしてさらに、巨万の財を藩にもたらしました。もとは農民の出身です。その財で快風丸と名付けた軍艦を買ったのです。

船価の高低鈌舌譁し
双檣に日落ちて影将に斜めならんとす
三盃の虜酒　纔かに酔いを成し
独り舷頭に倚りて　遠霞を看る

鈌舌は、孟子に出る、南蛮の言葉の表現です。虜酒はシャンパンでしょうか。結句は幕府の将来を憂えていたか。この人は明治政府に請われたが、務めませんでした。代わりに弟子を推薦し、その一人に、三島中洲がいます。中洲は大いに出世し、最後は大正天皇の侍講を務めました。その指導のもと、大正天皇は18歳から39歳の間に1367首の漢詩を作られました。今年は天皇の生誕130周年にあたりますので、いずれまとめてご紹介する積もりです。

ご静聴ありがとうございました。

（この原稿は、5月21日総会後の石川先生の記念講演を、住田笛雄氏が録音、そこからから書き起こされたものです。ご苦労様。）

◆研修会雑記

三橋　稟也

平成21年6月11日、25日の両日、恒例の春の研修会が行われました。前回と同様30数名の参加で2グループに分けての「選句会方式」による研修でした。

私は研修会は3回目の出席です。事前に郵送配布されてきた皆さんの詩稿16編を（今回私のBグループは16名でした。）充分に熟読玩味し、特選一首佳選2首を選んで勇躍参加致しました。

早々に皆さんの推薦詩が順に発表され、黒板に正の画数で記入されていきました。皆さん夫々期する処あるのは当然でしょう、高得点順に作者名が発表される時点では、会場に緊張した空気が漂いました。投票結果の黒板を眺めて思った事は、これまた当然のことですが、ベテランの諸先輩とキャリアの浅い私等如き新米との歴然とした投票数の差でした。とは言え、良く見れば新人で高得点を採られたもおいでで、おおいに刺激を受けました。

討論に入り、自分が選んだ詩篇への推薦理由や逆に推薦しなかった訳など述べると同時にそれに対する厳しい反論が出たり推敲案が出たり、皆さんしっかり勉強されておいでなのだなあと頭が下がる思いと溜息の連続でした。議論百出の熱気のなかでアッというまの3時間でした。

最高得点の礒野衛孝さんの詩をご披露します。

古津残陽（鎌倉和賀江津）
往昔帆船解纜津　往昔　帆船　解纜の津
今看頽壘退潮濱　今看る頽壘　退潮の浜
沈沙宋渡青磁片　沙に沈む宋渡の青磁片
訪歩残陽遂夢人　訪ね歩く残陽夢を遂う人

参考までに東鑑に記せられている和賀江津の一條を紹介します。

貞永元年（西暦1232年）
今日。勧進聖人往阿弥陀仏就申請。為無舟船着岸煩。可築和賀江島之由云々。武州殊御歓喜。令合力給。諸人又助成云々。
勧進上人（東大寺重源上人）　武州（北条泰時）

最後に、お忙しい中研修の場を設けて頂いた中山会長はじめ連盟役員の方々のご尽力に感謝します。

終

◆初心者入門講座異聞

「糸屋の娘」

礒野　衞孝

横浜の港が見えるが丘公園への急坂に散る桜花を踏み分けて4月17日今年も入門講座が始まりました。満開の薔薇に迎えられるかと思うと冷雨の紫陽花もあり、3ヶ月はあっという間で、7月2日15名の方が目出度く卒業されました。

今年の授業で変わっていて面白かったのは、中山会長のアイデアでの宿題でした。講義も半ばを過ぎ起承転結の段となり、かの有名な『糸屋の娘』を漢詩に翻訳せよということにあいなりました。

『京都三条の糸屋の娘、姉は十八妹は十六、諸国大名は弓矢で殺す、糸屋の娘は目で殺す』です。

教室は一時騒然となりましたが、シナリオはある訳だし、漢字で如何に表現するかの勉強になる、結果的に起承転結が身につく、トライすべしの言に約半数の方がまがりなりに宿題に挑戦し提出されました。

そのうちの一二、答案を紹介します。

A氏　大名弓矢射梟将　双美目挑戕野郎

B氏　戦国諸侯殺弓箭　峨眉流盼放妖光

例題の都都逸には殺の字が2回も使われていますが、漢詩では許されない。元歌を忠実に訳すと対句風になり、転結の始末をどう処理するか、一寸難しかったかもしれません。

模範解答を紹介しておきます。

石川芳雲作(書のお弟子さんからこの宿題を聞きこれは面白いと書かれた由)

京洛阿嬌将邀春　麗姿美貌一時新
英雄剛剣能屠敵　不若明眸悩殺人

中山　葦舟作

京洛三条服肆嬢　妙齢姉妹競新粧
武人可哂用刀剣　瞭眄阿嬌悩殺郎

どちらも虚字をたくみに使われ、殺を助字でさりげなく添えられている処がさすがです。貴方も挑戦してみませんか？

最後の授業は卒業作品の発表会でしたが、3ヶ月でこんなに新鮮な詩が作れるまでになるのかと驚かされました。我と吾が身を振り返り修練の気持ちを新たにした次第です。

今年の新人さんがまた漢詩界に新風を吹き込んでくれる事を期待しています。　終

◆初心者講座に参加して

菅野　省三

日ごろ唐詩選を教えて頂いてる玉井先生から「良い勉強になるから」と勧められ参加しました。全6回欠席することもなく楽しく受講できました。感謝の気持ちで、感想を述べさせて頂きます。

まず、この講座では、押韻、平仄の規則と2-2-3のリズムの重要性を徹底的に頭に叩き込まれました。押韻、平仄は以前から何となく理解していましたが、今体詩が確立するはるか前から綿々として続いていた漢詩の息ずかい、リズムへの理解が今一つでした。その点実習の時間を通じて身に染むように教えられました。

講座のカリキュラムは、中山先生の講義と連盟会員の先生がたの指導による小グループ実習で構成され、回を重ねるにつれ比重が後半の実習に移されていき受講者の習熟に合わせてバランスよく組み立てられていました。

講義では数多くの漢詩が板書され、それを書き取るのが大変で始は予めプリントして配られておれば時間の節約にもなるのにと思っていましたが、終わってみればこれも漢字に慣れ親しむために必要な労力であり、先生がたのご深慮と理解しました。

とにもかくにも七絶一首を仕上げて卒業いたしましたが、自立して持続的に作詩していける自信は無く、亦かかる機会をご用意下さるようお願い致します。

最後に中山先生を始め連盟の諸先生がたに、出来の悪い生徒を辛抱強くご指導いただいたこと、心から御礼申し上げます。　終

◆漢詩の愉しみ

玉井　幸久

唐詩選に「與盧員外象過崔處士興宗林」と題した王維の次のような七絶があります。

緑樹重陰蓋四隣　青苔日厚自無塵
科頭箕踞長松下　白眼看他世上人

崔興宗は王維の母方の従兄弟で、この時長安の南の終南山に隠棲していたらしい。そこに員外郎(役名)であった盧象と共に立ち寄った時の作というわけです。実はこの訪問には、他に王維の弟の王縉と友人の裴迪も同行したらしく次のような各人の詩とそれに酬いた崔興宗の詩が全唐詩に見られます。

先ず、盧象の詩

同王維過崔處士林亭　盧象

映竹時聞轉轆轤　當窗只見網蜘蛛
主人非病常高臥　環堵蒙籠一老儒

次に裴迪の詩(王縉の詩は紙幅の都合で省略)

與盧員外象過崔處士興宗林亭　裴迪

喬柯門裏自成陰　散髪窗中曾不簪
逍遥且喜従吾事　栄寵従来非我心

これに崔興宗が酬います。

酬王維盧象見過林亭　崔興宗

窮巷空林常閉關　悠然獨臥對前山
今朝忽枉嵇生駕　倒屣開門遥解顔

訪問者の詩には、外面に頓着せず悠々と老荘を学ぶこの家の主人の生活ぶりに驚きつつも、温かい共感と深い友情が感じられます。王維詩の「白眼看他世上人」は勿論竹林七賢阮籍(晋書阮籍伝)の「能為青白眼、見礼俗之士、以白眼對之」を踏まえたもの。盧象詩の轆轤は井戸の滑車。空林に響く水汲みの音は、回りの静寂を引き立たせ、網蜘蛛や環堵は質素な住居の様子を窺わせます。

崔興宗の詩には、この友人達を青眼を以って迎えた歓迎の気持ちが溢れています。倒屣開門は客の来訪を喜び、慌てて履物を逆に履いて出迎え、にっこりする様。

この数編の詩を並べて眺めていると、千年万里の時空を超えて、まるで作者達の清談に自分も加わっているような不思議な錯覚に襲われます。

漢詩読みの愉悦のひとときです。　終

◆本の紹介

「耳なし芳一が語る平家物語」

中野義人著　玉井幸久漢詩監修

今年5月末に、玉井先生の漢詩のお弟子さんでもある中野義人さんが表題の本をお出しになった。

平家物語を何度も読んでいる内に、自分の言葉で語ってみたくなり、琵琶法師の口を借りて平家一門の僅か30年にも満たない栄枯盛衰の歳月を読みやすい語り物にされた。

膨大な原本を巧みに著者の想いのある処に絞り、琵琶法師芳一に自在に語らせている。

新鮮なのは、12章に分けての山場ごとに漢詩が載っていることである。30数編の叙事詩が、物語の場面ごとに、主旋律が提示され、琵琶の音に乗ってその演奏を聴かされる感じになっている。

重盛懊悩

平氏専権凌上頻　平氏の専権　上を凌すこと頻りに
諫言血涙未匡親　諫言　血涙　未だ親を匡さず
欲忠不孝奈吾道　忠ならんと欲すれば　孝ならず　吾が道を奈せん
垂死牀中獨嘅呻　垂死の牀中　独り　嘅呻

玉井先生も上程を頭においての作者の漢詩の推敲の依頼に、かなり真剣に取り組まれたご様子、ご苦労の跡が伺える。

ご興味のある方は、玉井先生宛ご連絡ください。(TEL　045-874-1216　文芸書房　定価1260円)

◆エイジングコンプレックス

坂本　矗

窪寺先生の漢詩教室での勉強は、已に十年近くなる。後から来た人に追い抜かれて了うが、懲りずに続けられるのは、偏に先生の講義の魅力に因るものと、大変有り難く思っています。感謝といえば急逝された大久保静夫氏のこと。氏がある時「哭河住玄先生」と題する詩を発表された。恩師のお名前のお陰で同郷、同学の先輩であることが分かり、以来大変お世話になった。氏の編された「三字句平韻集」は、今でも有力な武器になっている。漢詩による奇縁だが、慙愧の至りである。

上達への早道など無く、「三多」を旨とすべしとは承知しているが、性来の懶惰、中々難しい。特に作詩の方は月に二、三作作るのが精々。昨年の連盟の大会で、毎日朝の散歩の後に必ず作詩するという話を聞き、余りの落差に愕然とし「此身合是詩人未」ならぬ「此身得適詩人否」と考えて了う。二、三回の推敲では駄目最低五、六回やらねば、とは、中山会長のお言葉。耳が痛い。先人の作を多く読むことや、下手な考えでも、推敲に時間をかける位の事は、せめてやって行こう？と思う。

この私でも、すぐには思いつかないが、翌日にハッと気がつくことがある。脳味噌樽の中のエイジング効果であろうか。これは、嘗て専攻したサブミクロン粉体工学でも重要な技術手法であったが、人間社会では「加齢」という言葉で一くくりにされ隅に追いやられて了う。情けないことである。

俳句に「二物対峙」という概念があるとか。異種のものが絶妙な距離を置いて一句の中で主張しあう。漢詩でもそんな感覚が必要なのかなど、と愚考する。最近の脳科学では、fMRIや近赤外トポグラフイ　といった分析機器の発達で、脳の働きを具に観察できるという。苦吟の時と、うまく行った時の状態とを比較解析して、何らかのスティムラス(刺激)を与えることで、後者を発現、増幅させる事が出来るようになればなどと、夢想している極楽蜻蛉である。

終

◆凍梨を超えて貴方は詩作に頑張れるか

凍梨と言う言葉がある。もともとは老人の皮膚の色のことであるが、九十歳を超えたお年寄りのことをも言う。

このところお目にかかってない山内大五さんから詩が送られてきた。まさか研修会にご出席の意でもあるやとお電話した。お元気そうであった。勿論、集会へのご参加などさらさら無く、何となく詩が出来たので送った旨お聞きした。融通無碍の境地にある方、あらぬ詮索は無用である。

思えば、九〇歳を期して上梓された詩集、「函亭詩鈔」を頂戴してから、もう四年、ご親族のエスコート付きで教室にお出ましなされていた姿を思い出した。

送られてきた詩をご披露する。

聽雨聲

累年嘉歳肆閑行　減白増黄一笑迎
酒旨肴甘共相和　獨對残燈聽雨聲

毎年豊年で閑な暮しをほしいままにして、減白といい増黄といわるるも一笑してきた。酒は旨いし肴は甘く　両々相和している。独り　残灯に向かい　雨の音を聴いている。

翁の詩は、昔と変わらず、悠々たる仙境に遊んでおいでであった。

吾が身に置き換えて、老いに負けず九三～九四歳でこんな詩作ができるか、前出坂本氏の話ではないが、脳の働きを維持できるのか、自信は全く無い。

山内さんの期頤(百歳)の詩を見たいものである。

(田原)

◆ 頼三樹三郎のこと

岡崎　勝郎

東武浅草から次駅南千住で降りて周辺を歩く、とこの辺りをむかし骨ケ(小塚)原と言った。刑死累々鬼火青　枕頭時覚北風腥　(大橋正順)。ここに両国回向院の分院があって、斬首，梟首に遭った幾多の罪人が土葬された処である。

安政六年十月、頼三樹三郎もまた吉田松陰と前後して斬首され亡骸をここに棄てられた一人である。

友の北蝦夷へ行くを送る江差にて　三樹

大濤日夜屋撼鳴　憐向洋中掛帆行
日照石河鯨背静　風吹宗谷雪山崩

大濤日夜屋を撼して鳴る　憐れむ洋中に向い帆を掛けて行くを　日は石(狩)川を照らし鯨背(なみがしら)静か　風は宗谷に吹いて雪山崩る

……律詩であり以下略す。

松前から江差に訪ね、折しも蝦夷探旅中でこの地の斉藤鴎洲の宅に寄寓していた松浦武四郎(伊勢の人で号は北海)と三樹が出会う。北海の跋文『図らずも頼三樹と邂逅して喜び望外に出ず。詩を論じ文を談ずるの余、鴎洲戯れに眼前即事の語を拾うて題を命じ』北海が篆刻、三樹がそれを詩句に詠ずるの趣向を立てた。世に言う『百刻百吟』の雅興は弘化三年十月のある一日だった。この時、三樹二十三歳。

五言絶句、その第一題は「清晨」で始まる。

第二題「開窓」

開窓何甚早　今日有清課
印士興吟人　百詩戦百顆

第二六題「床間古刀」

十歳蔵霊剣　風塵老燕城
長嘆雷雨夜　鞘中彼亦鳴

第百題「成課」

驢前引太白　一百課成時
寒詩興頑印　狂跡留天涯

なんとも意気や盛んである。因みに蝦夷を北海道というはこれ松浦武四郎の「吾北海道人也」から採られた明治以後の地名である。

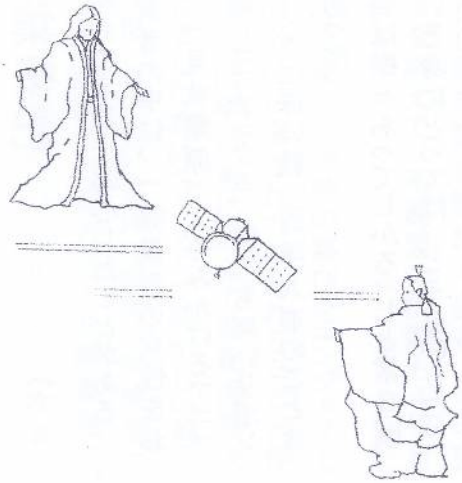
さてこれだけで充分であるのに、三樹という男濫りに血気豪放の性(自ら古狂生と名乗った)で、その後故郷の京都へ帰ってから、大人しく亡き父山陽の「眞塾」の後継先生で納まっていればよいものを、周防の僧月性や梁川星巌らと結託して尊皇攘夷の憂士にかぶれていく。あまつさえ星巌との間で謀って作った檄文「隠居謹慎中の水老(水戸烈公斉昭)を謀反せしめて争乱の世となし、徳川の天下を京都に預かる」との文言。京都の天子を徳川が預かる(この時期はそうであった)の本末転倒の文書を、山陽と親しかった宮家近衛忠熙公に手渡したのが幕府方に発覚し、安政五年捕らえられて江戸送り。北町奉行により吟味預かりの身となり、翌年に死罪を申し付けられ、伝馬町の牢獄で斬刑に処せられた。

一説には奉行の処案は遠島くらいであったらしい。それを大老井伊が「一筆抹殺に附して極刑に臨むべし」と命じた旨、木崎好尚「頼三樹伝」にある。

小塚原に捨てられた彼の遺骸は、のち塾生たちの手で両国回向院に、松陰の碑に並べて埋葬された。「鴨崖墓」がそれである。

前述本を読み終えての感想。この男どうにも好きになれなかったが、どこか可愛そうな風情が残る。一徹直情に過ぎる。自他憚るところが無い。親の七光りの所為なのか。お前は詩が下手だと星巌師から絶えず叱咤されていた。その星巌も捕らえられて然るべきに、三樹捕縛の3日前にコレラに罹って急死した。代わりに捕吏は妻の柳川紅蘭を獄屋に入れたが、彼女は一年後に赦免された。檄文を読んだ近衛忠宏公は「水老が幕府に叛旗を上げるなどあることないのに、三樹は何を考えてのことなのか」と側近に洩らした由。猪突猛進、幕末の乱世を遮二無二駆け抜けざるを得なかった性がなんとも哀しい。

終



今期後半のスケジュール

カレンダーに予定を記入しましょう

◎研修会

前回にひきつづき「選句会方式」で実施します。

事前に漢詩一首をご投稿頂き、集まった詩稿は作者名を伏せあらかじめ参加者に当方より郵送します。その詩稿の中から特選佳選を事前に選考して頂いておいて当日発表してもらいます。

2グループに分けて実施します。どちらか選んで投稿して下さい。

▽時期　Aグループ　平成21年10月27日(火)午後1時～4時
　　Bグループ　平成21年11月19日(木)午後1時～4時

▽場所　神奈川近代文学館　2階会議室

▽詩稿提出期限　平成21年10月13日(火)まで事務局宛　期日厳守

◎新人フオローアップ研修会

春の初心者入門講座に参加された方を中心に新人の研修を行います。参加される方は、七言絶句一首を用意して下さい。

▽時期　平成21年10月6日(火)午後1時～4時

▽場所　神奈川近代文学館　2階会議室

▽詩稿は規定の用紙(B5)を使用し、コピーを20枚作成し持参のこと

◎小田原城吟行会

今期の吟行会は早春の小田原城周辺の散策です。桜が咲いているこの時期を予定しました。年明けに改めて往復葉書でご意向を伺います。

▽時期　平成22年3月30日(火)　午前10時半～

▽場所　JR小田原駅東口2階　二宮尊徳像前に集合

▽昼食　料理屋『だるま料理店本店』(登録有形文化財)

◆編集後記

▽今回の総会でえらく感心したことがある。大勢の入賞者の中に、一際異彩の女性をお見かけした。一見秋葉原でよくみかけるアニメ風キャラの黒いコスチュウム、髪にも黒いリボン、黒いストッキングに赤い靴、西洋人形のごとき出で立ちであった。

女性の服装は様々あってしかるべしと常日頃馴らされている身にとっては、どうということも無く、世話役の忙しさで気にもかけなかった。が、突然気付いた。赤い靴だ！彼女は「赤い靴、履いていた、女の子」で登場していたのだ。この爺婆ばかりのともすればムサい漢詩の集まりに一陣の爽風を吹き入れんと、さりげなく、異人さんに連れられた女の子の衣装をまとっていたのだ。嬉しくて涙が出そうであった。

彼女の心意気を、遊び心を、貴方は知っていたか？主演女優賞を上げたい気持ちであった。よし！俺も次の岡山の大会で僥倖にも入賞した暁には、桃太郎の衣装で出席してみせるぞ。

聞けばその方のご亭主は、漢学漢詩界の泰斗鷲野正明先生との事、またまた驚いた。

▽選挙は8月末となり熱い政治の夏が続く。政権交代は本当に起きるのか、起きたとしても、果たして民主党は官僚を旨く使いこなしてやっていけるのだろうか。

夏の花火で終らせないで欲しい。　（田原）